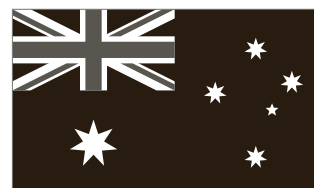


# オーストラリア 海外散歩



## オーストラリア・ケアンズ 憧れのパラダイス

東京大学  
特任教授 山田 靖子

オーストラリア北西部に位置するケアンズはバードウォッチャーに人気の探鳥地である。南緯17度で熱帯から亜熱帯の気候である。海外バードウォッチングの成功は有能なガイドを見つけることで決まると言っても過言ではない。ケアンズにはオーストラリア在住の日本人野鳥ガイドOさんがいるので、まずOさんのスケジュールを抑えることから計画を始めた。2016年2月に交渉を始めて、9か月先の11月下旬のケアンズ行が決まった。なぜこの時期かというと、パラダイスキング

フィッシャー（和名：シラオラケツトカワセミ）という美しい鳥が営巣のためにケアンズに渡ってくるからである。まさしく憧れのパラダイスである。

私たち夫婦の鳥の写真を撮る役割分担は、亭主が望遠レンズで一眼レフカメラ手持ち撮影、私が望遠鏡（スコープ）にデジタルカメラを付けて撮影（デジスコと呼ばれる）である。動きの速い鳥は手持ち撮影、遠くの鳥はデジスコが威力を発揮する。早朝にケアンズに着き、Oさんの車の助手席に私、後部座席に亭主が陣取る。ドライ

ブ中にも鳥は出現するので、右に出ても左であっても対応の早い手持ち撮影ができるようにとの思惑である。最初の探鳥ポイントに着いて準備を始めたとき、私が悲鳴を上げた。なんとスコープとデジカメを固定するアダプターを忘れてきたのだ。憧れのケアンズに来ているのにデジスコができない、手足をもがれた感である。しかし、忘れてきたものはしかたがない。鳥の写真は亭主の手持ち撮影にがんばってもらうしかない。

Oさんは6日間の間に、湿地、海岸、熱帯雨林、乾燥林、マング





ローブ林、牧草地、乾燥地帯など、標高は0mの海岸から1,100mの山まで実に多様な環境へ案内してくれた。今まで頭ではわかっていたが、野鳥や動物はそれぞれの種によって棲息する環境が違うことを体で感じる事ができた。今回の旅行中に観察した鳥は203種、動物は27種に及んだ。

初日の午前中はケアンズ近郊の湿地と公園で鳥を探す。トサカレンカクが沼の水上を歩いていた。蓮の葉の上を歩いても沈まないように足の指がとても長い。Oさんから水際に近づき過ぎないように注意があった。ワニがガバッと襲いかかってくることがある、という。さすがにオーストラリアの熱帯地域、映画クロコダイルダンディの世界だ。ケアンズの海岸はちょうど干潟になっていて、そこに鳥が集まっていた。シギ・チドリの仲間、アジサシ、カモメの中に混じって、コシグロペリカ

やつだ。

午後からケアンズの街を離れて、高原地帯へ向けて南下する。今回の旅行中に宿泊した宿はどれもキッチン付きで、朝食は自分たちで用意する。宿へ向かう途中の街で滞在中の朝食用食材とアルコール飲料を仕入れる。私たちはどこへ行っても夜のアルコールが欠かせない哀しい習性である。宿は熱帯雨林の中に点在する6棟のコテージのひとつで、部屋はキッチン、ダイニング、ベッドルーム、バスルームからなる。チェックインしてしばらく休憩、と言われたが、部屋の前の樹に次々鳥が現れるので休憩なんてしてられない。熱帯雨林というと鬱蒼とした森をイメージしがちだが、日本の森とそれほど変わらない。これはマレーシア、タイ、フィリピン、などを旅した時の印象と同じである。夕方の探鳥をしつつ、スイス・

ンは体が大きくてすっとんきょうでアイリングが思わず微笑みを誘う愛らしい

イタリアンレストランで夕食を取る。黒柳哲子を彷彿とさせる髪型の姉御がフロアを仕切っていて、活気があるレストランである。

宿に戻るころはもう暗く、星空を観察するために駐車したところでトイレに行こうとしたらOさんに止められた。トイレの明かりにヘビやカエルが集まっていたとお勧めできない、とのこと。ヘビやカエルがたむろしている様子を想像しただけでぞっとした。宿に戻ると、ライトアップされている数本の樹があった。フクロモモンガとフクロシマリスが幹に貼りついて樹液を舐めていた。手が届きそうな距離で観察している我々など全くお構いなしである。

2日目の朝は未明の鳥の大コーラスで始まった。熱帯雨林の音のイメージそのものである。ミャ〜と大きな声でキャットバード（和名:ミミグロネコドリ）、ウィップと大きな短い声はウィップバード（和名:ムナグロシラヒゲドリ）。羽をバサッと広げて求愛ダンスをするコウロコフウチョウはテレビのコマーシャルでおなじみだが、



今は求愛ダンスをする時期ではなく、ダンスの踊り場はひっそりしていた。青黒い羽毛色の雄を見かけることが少なかったが、雄の羽毛色になると他の雄に攻撃されて生きていくのが大変なので、多くの雄は雌と同じ茶色い羽毛色でのんびりしているようだ。

午前中は熱帯雨林を離れて乾燥した林で探鳥し、その環境に特有の鳥たちを楽しんだ。ワライカワセミは開けた場所の枝に止まって、ワッハッハーと愉快的声で啼く。カンガルーというと赤い台地を飛び跳ねている姿を思い浮かべるが、キノボリカンガルーは高い樹の横枝の上で寝ていて、そこから長い尾を垂らしていた。昼食に立ち寄ったカフェテリアでは、鮮やかな青色のオオルリアゲハが花の蜜を吸いに来ていた。鳥や動物に気を取られて、朝食も昼食もゆっくり食べられないのはバードウォッチャーの宿命である。

午後はいよいよカモノハシを探しに行く。なかなか見ることができない手強い相手である。カモノハシは夕方になると水面下にある巣穴の出入り口から餌を取るため

に水の中に出てくる。3～5分に1回息継ぎに水上に顔を出す。とても臆病なので観察する秘訣は、見つけてもすぐに動かず、カモノハシが潜ってから移動すること。少し開けた河の水面にカモノハシが浮いてきた。3、4匹はいるようだ。しかし遠くて、ぶちゃむくれの顔と手足が枯葉のように水面に浮かぶのを観察するのが精いっぱい。しばらく観察してから引き上げることにして、車で小川に架かる橋を渡ろうとしたとき、私がすぐ下の小川にカモノハシがいるのを見つけた。手が届きそうな距離である。興奮で声が出ず、「そこそこ」と指をさした。亭主が後部座席から間髪入れずに写真を撮った。こちらに気が付いたカモノハシは一瞬のうちに体を翻して小川を泳いで行ってしまった。

文化遺産のような古い木造のカフェで夕食を済ませ、ナイトウォッチングに出かける。牧草地の中を走っていると、杭や標識にメンフクロウが止まっていた。飛んでいる個体も多く、道を何度も横切る。その夜のメンフクロウの数は記録的だったようだ。夜行

性の有袋類を観察し、車道をヘビが横切ったり、バンディクートというウサギとネズミの中間のような有袋類が道で何かを食べていたり、暗闇は動物たちの動きに満ちていた。

3日目は農耕地で探鳥をする。畑はとにかく広く、そして赤い。その畑に水を撒くスプリンクラーは200mもありそうな長さで、水を撒きながら移動していた。探鳥する場所は大きな街から離れている所が多い。小さな街の中心にある木造の建物は西部劇に出てきそうな趣である。旅行中はそんな小さな街のなんでも屋さんでミートパイの昼食を取ることが多かった。ミートパイは日本のおにぎりのようなもので、安くて早くておいしい。

4日目は次の目的地ケアンズ北部に向けて移動する。Oさんが運転中にエリマキトカゲを発見。えっ、どこに？と思ったが、なんと樹の幹に縦に張りついていて、我々が近づいても動かない。草地を走るイメージとは全く違う。オオカンガルーの群れは木陰でお休み中。イワワラビー、ヤブワラ





ビー、スナイロワラビーなども日陰から出てこない。彼らの熱中症対策なのだろう。道端の樹にオオコウモリの大群がぶら下がっていた。植物の実や蜜を食するフルーツバットである。目視で飛ぶため目が大きくキツネのような顔をしている。乾燥した赤土の大地には1mはあるアリ塚がぼこぼこと林立している。ブッシュの向こうに3羽のエミューがいた。だんだん我々の方に向かって来て、彼らの息使いが聞こえそうな距離まで近づいてきた。背丈は私と同じくらいある。Oさんに「どうしたらいいんですか」と聞いたら、彼らの進む道をふさがないように、との指示であった。じっとして通り過ぎるのを待った。ああ怖かった～。

バードウォッチャーの宿に到着。こちらの宿もキッチン、ダイニング、2ベッドルーム付きのコテージである。宿の周りではお目当てのパラダイスキングフィッシュャーがあちこちに出現した。期待を裏切らない美しさである。花

のある樹にはミツスイの仲間が集まってきて、中でもクレナイミツスイは真紅で美しい。ガマグチヨタカが営巣していたが、「あそこにいるよ」と言われなければ樹のこぶと見分けられない。髭のあるおかしなやつだ。夕食は熱帯雨林を見下ろすレストラン。映画アバターは架空の星の設定だが、ケアンズの森が元になっているそうだ。アバターの星で森の上を飛んでいた翼竜が今にも現れそうである。

5日目は乾燥が進んだ土地と標高の高い山でそれぞれの環境の鳥を探す。6日目の朝、ヤイロチョウに出会えた。なかなか見ることができない鳥である。Oさんが自分のスコープでとらえてくれたので、そのスコープに私のデジカメを押し付けて写真を撮った。もしアダプターでデジカメを私のスコープに固定していたら写真を撮れなかっただろう。不幸中の「超」幸いであった。

高原から海岸に降りて、ケアンズに戻る。とにかく暑いマンゲ

ローブの林で、愛らしいオーストラリアムシクイを探したが、ちらっとしか見ることができず、次の訪問の宿題となった。オーストラリアにはインコ、オウムの仲間がいるが、旅行中、何種類もの鮮やかなインコに出会った。

ケアンズの街からは二人の旅となる。中心地にある宿はキッチン付きのコンドミニウムであるが、受付は朝7時から夜7時の間しか開いていない。土、日はさらに短く朝8時から夜6時までだ。時間外のチェックイン、チェックアウトはどうするのだろうか。受付不在中は、宿泊者は鍵でホテルのフロントドアを開けて出入りする。

帆船クルージングでグレートバリアリーフに浮かぶミコマスケイという小さな島を訪れた。コバルトブルーの美しい海とサンゴのかげらでできた白い砂浜。ミコマスケイはそのほとんどの区域が海鳥の保護区になっていて、まさに海鳥の楽園である。カツオドリの親はだいぶ大きくなった白い雛と並





んでいる。クロアジサシは白い砂の上で雛や卵を抱いている。ペンガルアジサシはものすごい数が密集している。写真撮影を楽しんだ後、機材を砂浜に置いてシュノーケリングをやってみた。初めは何度か海水を飲んだが、そのうち慣れてきてサンゴの上まで出て行けるようになり、サンゴの中を泳ぐ

魚やシャコガイを観ることができた。なんでもやってみるものだ。

日本へ向けての飛行機が飛び立って1時間近く、上空からグレートバリアリーフの美しいコバルトブルーの海とそこに点在する白い島々の風景を楽しむことができた。機中泊を含めて9日間の旅、最後まで自然を満喫した。本

稿の写真は白黒であり、鳥の美しさは白黒では伝わらない。亭主の退官を記念して30年間撮りためた写真を1冊の本にまとめた。日本実験動物協会事務所に寄贈するので、事務所を訪れた際にカラーでご覧いただければ幸いである。  
(日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照)

## 時代の先端を目指す研究者へのサポート

**NAFO VANNY**

ベトナム・中国産 **カニクイザル**  
中国・米国産 **アカゲザル**

**harlan™**

**Hannover Wistar Rat**  
**RccHan™ : WIST**

**COVANCE.**  
THE DEVELOPMENT SERVICES COMPANY  
Covance Research Products Inc.  
Cumberland, VA

**CRP.VAビーグル**  
**CRP交雑犬**  
**CRPハウンド**

◎預り飼育 ◎非GLP受託試験 ◎各種実験動物 ◎実験動物器具器材

**JLA 株式会社 日本医科学動物資材研究所**

〒179-0074 東京都練馬区春日町6丁目10番40号  
TEL: 03(3990)3303 FAX: 03(3998)2243  
URL: <http://www.jla-net.com/> E-Mail: [nikagaku@jla-net.com](mailto:nikagaku@jla-net.com)